

## A県のデイサービスにおける医療的ケアの必要な 要介護高齢者に対する看護ケアの現状

小嶋美沙子<sup>1)</sup>, 千田睦美<sup>2)</sup>, 土屋陽子<sup>3)</sup>, 内海香子<sup>2)</sup>

### Current status of nursing care for elderly requiring medical care in day-care services in Prefecture A

Misako Kojima<sup>1)</sup>, Mutsumi Chida<sup>2)</sup>, Yoko Tsuchiya<sup>3)</sup>, Kyoko Uchiumi<sup>2)</sup>

#### 要 旨

目的：医療的ケアの必要な要介護高齢者に対するデイサービス看護師の看護ケアと、医療情報を得るための訪問看護師との関わりを明らかにする。

方法：デイサービス事業所に勤務する医療的ケアの必要な要介護高齢者に関わったことのある看護師を対象に、デイサービスでの看護ケアと、医療情報を得るための訪問看護師との関わりについて、半構成的面接を実施し質的に分析した。

結果：インタビュー内容から、看護ケアとして、【高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために、職場の体制や環境を整える】ことを基盤としながら、【高齢者に必要な医療処置を行う】他、看護ケアの重要な一部として、【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる】など、6カテゴリーが抽出された。医療情報を得るための訪問看護師との関わりは、【高齢者看護に活かすために、直接、生活面を含む医療的ケアや疑問、実施してほしいことについて、訪問看護師と情報を交換する】など、3カテゴリーが抽出された。

結論：デイサービス看護師が実践している看護ケアの基盤や重要視していること、訪問看護師との関わり現状が明らかとなった。

キーワード：デイサービス、医療的ケア、看護ケア、訪問看護、連携

#### I. はじめに

我が国の高齢化が進む中、2025年の医療機能別必要病床数が115～119万床程度に減少するとされており（厚生労働省、2016）、在宅で生活する医療的ケアの必要な要介護高齢者の増加が予測される。そのため、厚生労働省（2012）は、地域包括ケアシステムを推進し、居宅介護支援と医療等との連携強化を推奨している。地域包括ケアシステムは、「可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるような包括的な支援・サービス提供体制の構築を目指す」ものであり（地域包括ケア研究会、2013）、住ん

でいるところを問わず、一人一人にとって、医療や介護サービスが適切に受けられる社会を目指していると言える。

医療的ケアの必要な要介護高齢者の利用を目的としている療養通所介護事業所は、全国でわずか85箇所であり（厚生労働省、2017）、医療的ケアの必要な要介護高齢者は、自宅に訪問してもらう居宅サービスの利用、または、自宅からの外出や家族のレスパイトケアとしての通所サービスに利用が限られている。

また、療養通所介護事業所の看護師に、療養通所介護事業所の利用者に関する調査をした結

受付日：令和2年6月5日 受理日：令和2年8月17日

<sup>1)</sup> 岩手県立大学看護学部 岩手県立大学大学院看護学研究科博士後期課程在籍

<sup>2)</sup> 岩手県立大学看護学部 Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University

<sup>3)</sup> 弘前学院大学看護学部 Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University

果、一般の通所介護(以下、デイサービスとする)では受け入れ対応ができない理由について、「利用者が医療的ケアを必要とするため」が最も多かった(日本訪問看護振興財団, 2010)。

デイサービスの看護ケアに関する研究について、医学中央雑誌web版1986年～2019年で“デイサービス”“看護”“高齢者”(会議録除く、看護文献、原著論文)をキーワードとして検索すると、2000年以降の研究論文は135件であった。これら135件のうち、デイサービスの看護ケアに関連した内容の文献は、デイサービスを利用する要介護高齢者と家族の現状について4件、デイサービスを利用する要介護高齢者に対する援助について2件、デイサービスを含む在宅サービスの多職種連携について3件であった。

デイサービスを利用する要介護高齢者と家族の現状に関する研究では、デイサービスやデイケアの利用者は、未利用者に比べて外出することが有意に高いこと(水尻, 2002)が明らかとなっている。また、要介護高齢者がデイサービス利用後に安堵感を持つなど自尊感情の向上が見られること(長澤・千葉, 2016)、在宅で要介護高齢者を介護する在宅介護者の心身状態を考慮しながらサービスの利用回数を検討すること(川上他, 2002)、デイサービスなどの利用が要介護高齢者と家族の双方に身体的・精神的な負担の軽減になっていること(東口他, 2017)が明らかになり、デイサービスの利用が、要介護高齢者と主介護者の両者に、日常生活や精神面における改善などの効果があると示されている。

デイサービスを利用する要介護高齢者に対する援助に関する研究では、デイサービスを利用する要介護高齢者の安心へのニーズの捉え方と支援内容(岡本・竹崎, 2013)、デイサービスにおいて看護職同士の連携が困難で、役割も不明瞭というデイサービスの脆弱な看護体制や、看護の役割として家族支援の認識が低いこと(竹森, 2009)などが見られた。

デイサービスを利用する要介護高齢者に対する精神的援助の具体的な内容が報告されている一方で、看護職の役割の不明瞭さが明らかにされている。

さらに、在宅サービスの多職種連携に関する研究では、外来看護師が中心となって訪問看護、デイサービス、ヘルパーと協力して介入し、適切なケアの提供と継続につながられている(小

西・上山, 2018)が、デイサービス看護職と健康管理に関する多職種との連携が少ないこと(新田・望月・清水・上村, 2005, 深谷, 2016)が明らかにされ、多職種連携の必要性は明白であるものの、多職種連携の実施の少なさが示されている。

以上より、要介護高齢者と家族にとって、身体面や精神面での改善や負担の軽減が見られるなどの良い効果が明らかになっているが、デイサービスにおける要介護高齢者に対する看護ケアは、精神面での援助などの一部しか明らかにされていない。また、デイサービスにおける看護職の役割が不明瞭であり、医療的ケアを含むデイサービスでの看護ケア全体が明らかにされていない。さらに、医療的ケアに必要な要介護高齢者を支援するためには、多職種連携の必要性や有効性が重要視されているが、デイサービスの看護職の多職種連携の少なさが明らかにされている。そこで、広大な面積であるものの療養通所介護事業所が全国の数と比べて少ないA県の、デイサービスにおける医療的ケアの必要な要介護高齢者の看護ケアの現状を明らかにすることが、今後、他地域のサービスを検討する際の基礎資料になると考えた。

本研究の目的は、A県のデイサービス事業所に勤務する看護師が医療的ケアの必要な要介護高齢者に実践している看護ケアと、医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わりを明らかにすることである。A県のデイサービス事業所に勤務する看護師が医療的ケアの必要な要介護高齢者に実践している看護ケアと、医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わりが明確になることにより、デイサービス事業所に勤務する看護師と訪問看護師の連携の強化について示唆が得られると考える。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究

### 2. 用語の操作的定義

#### 1) 医療的ケア

デイサービスを利用する医療的ケアの必要な要介護高齢者のうち、日本訪問看護振興財団(2010)の調査研究報告書において、ケアマネジャーがデイサービス利用を断られ

た理由としてあげた項目の調査結果から、以下の内容とした。

人工呼吸器の管理，胃ろうの管理，経管栄養の管理，利用者の状態管理（イレウス，内出血斑，褥瘡，嘔吐，痙攣発作等），感染管理，カテーテル管理，ターミナルケア（専門的看護，緊急時対応），利用者の状態にあった食事・食べ方へのケア

## 2) 看護ケア

デイサービスを利用する医療的ケアの必要な要介護高齢者に対し，デイサービス看護師が直接的あるいは間接的に行う援助。

## 3) 要介護高齢者

要介護認定において，要介護1～5と認定された65歳以上の者。

## 4) 連携

看護ケアにおいて，同じ目標を持つ専門職が互いに協力関係を取りながら行為や活動を展開すること。

## 3. 研究参加者

A県B医療圏のデイサービス事業所に勤務する看護師（以下，デイ看護師とする）のうち，医療的ケアの必要な要介護高齢者（以下，要医療要介護高齢者とする）に関わったことのある者で，本研究の趣旨を説明し，同意が得られた者を研究参加者（以下，参加者とする）とした。

## 4. データ収集期間

2016年2月～7月。

## 5. データ収集方法

A県内にあるB医療圏のデイサービス事業所（204箇所）の管理者に，研究の趣旨を郵送し，要医療要介護高齢者に関わっている研究対象者の紹介の可否について，返信用ハガキで返信してもらい，調査に協力の得られるデイサービス事業所を決定した。

次に，調査に協力の得られたデイサービス事業所の管理者に電話で連絡し，研究対象となるデイ看護師を紹介してもらった後，研究対象者に研究の趣旨を説明し，内諾を得た。面接日時について研究対象者と相談のうえ決定し，研究対象者の希望するプライバシーの確保できる場所で半構成的面接を行った。面接内容は研究対象者の許可を得て，ICレコーダーに録音した。

調査内容は，研究参加者の概要として，年齢，

看護師としての総勤務年数，現在勤務しているデイサービス事業所での勤務年数，現在勤務しているデイサービス事業所以外での勤務経験，要医療要介護高齢者に対するデイサービスにおける看護ケアおよび要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わりとした。

## 6. 分析方法

1) 逐語録を作成，精読し，逐語録から，要医療要介護高齢者に対するデイサービスにおける看護ケアおよび要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るためのデイサービスにおける訪問看護師との関わりに関連する記述を抽出し，意味を損なわないように一文一意味の1次コードにした。

2) 1次コードを意味の類似性に着目して整理し，質的帰納的に分析した。

3) カテゴリー化した最終的な抽出物をカテゴリー，その1段階前をサブカテゴリーとした。

4) 分析の過程において，質的研究および高齢者看護の専門家からのスーパーバイズを受け，信憑性の確保に努めた。

## 7. 倫理的配慮

本研究は，岩手県立大学大学院看護学研究科倫理審査会の承認（承認番号：2015-D002）を得た。また，研究対象者には研究の趣旨，研究方法およびICレコーダーへの録音，研究参加の任意性および辞退の自由，個人および事業所情報の守秘，データの管理および廃棄方法，研究結果の公表を文書と口頭で説明し，同意が得られた場合に同意書への署名をしていただいた。なお，分析から研究結果の公表を含め，参加者および事業所が特定されないように，逐語録作成段階から固有名詞は匿名化し，データは研究者のみが取り扱い，録音内容は逐語録作成後に消去した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 参加者の概要

本研究への同意が得られた参加者は11名で，全て分析対象とした。参加者は全て女性であり，平均年齢は50.8歳±12.10歳であった。また，現在勤務しているデイサービス事業所での看護師勤務年数は平均3.1年±2.40年，看護師としての総勤務年数は，12～13年を12.5年，37～38年

を37.5年とし、平均21.6年±13.23年であった（表1）。

## 2. デイ看護師が要医療要介護高齢者に実践している看護ケア

11名の語りから、要医療要介護高齢者に対するデイサービスにおける看護ケアとして、1118の1次コード、302の2次コード、142の3次コード、60の4次コード、24の5次コード、10の6次コード、6つの7次コードが抽出された。

7次コードをカテゴリー、6次コードをサブカテゴリーとした（表2）。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉、参加者の語りを「斜体（A～K）」で表す。以下、カテゴリーについて説明する。

### 1) 【高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために、職場の体制や環境を整える】

このカテゴリーは、高齢者の健康面を確実に支援するため高齢者のケアに責任をもつ必要性を感じて、職場体制や環境を整え、介護士と連携するという看護ケアであった。

デイ看護師は、高齢者の状態を観察して医師の受診を勧めるなど、〈高齢者の健康面を不安なく確実に支援できるよう、ケアに責任をもつために、職場体制や環境を整える（る）〉していた。また、デイ看護師が不在時の予測指示を介護士に伝えておき、〈看護師が不在の時でも介護士が安心できるように、看護師は医療的知識を介護士に伝え（る）〉していた。

「（看護師が不在の時に）こういう時があった時は、こういうふうにして下さいっていうのは（看護師から介護士に）何個かこう、伝えてて。（E）」

一方、デイ看護師は高齢者の変化に気づいても、医師の診断や治療を受け入れ、デイ看護師として1つの変化のみならず身体全体を整えて高齢者の状態が悪化しないようにしながら、〈高齢者への医師の診断や治療を納得できなくても、受け入れ（る）〉していた。

「でも、先生が言うんだったら、私たちは何も言えないしね。受け入れられるぐらいしかないのかなと、思いますね。（B）」

### 2) 【生活面を含む医療的ケアについて、介護士と情報を共有し、高齢者のセルフケア能力や身体状況をアセスメントして高齢者に適した関わりをする】

このカテゴリーは、デイ看護師が、高齢者

の状態を理解するために医療面での情報を介護士と共有しながら、セルフケア能力や身体的特徴をアセスメントし、高齢者の状態に合った関わりをする看護ケアであった。

デイ看護師は、要医療要介護高齢者がデイサービスを利用する時、医療的ケアに関する高齢者の手技を観察しながら見守りを中心に行い、〈食事を含め、医療的ケアについて高齢者のセルフケア能力や身体的特徴をアセスメントし、高齢者に合った関わりを（する）〉していた。また、デイ看護師は、高齢者の日々の変化を観察し、〈介護士と情報を共有したり高齢者の観察から、高齢者の状態をアセスメント（する）〉していた。

「そうです、見守り。基本的に、見守り中心ですね（G）。」

### 3) 【家族は在宅介護が大変で、高齢者の病気の理解が難しいので、できるだけ高齢者の疾患や体調の変化、事業所の方針を伝え、家族の病識や思い、希望を尊重して関わる】

このカテゴリーは、家族が高齢者の在宅介護をすることが大変であることを理解しているからこそ、高齢者のデイサービスでの様子や病状についてできるだけ家族に伝えて、家族の思いや希望を引き出し、尊重して関わる看護ケアであった。

デイ看護師は、高齢者の思いを考慮しながらも家族の状況を加味し、〈家族は医療面の理解が難しく、在宅介護が大変なので、事業所の方針を伝えたいので、家族の思いや希望、病識を尊重しながら関わ（る）〉っていた。また、デイ看護師は、高齢者の送迎などの機会に、高齢者の状態を家族から聞いたりデイ看護師から家族に伝え、家族との連絡に連絡帳を使用するなど、〈高齢者と家族の理解を深めるために、家族と直接会ったり、連絡帳や介護士を介して、医療的ケアや疾患、体調の変化の情報を共有（する）〉していた。

「送ってった時とか、迎えに行った時は、（家族と話す）チャンスなので。（中略）その時に状態を聞いたり、こっちのことを伝えたりっていうふうな。（C）」

### 4) 【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる】

このカテゴリーは、デイサービスが高齢者の生活の一部となっているため、高齢者の状

態や思いや特徴を尊重することに加えて、デイサービスを利用しながら高齢者が楽しく安心して過ごせるように関わる看護ケアであった。

デイ看護師は、デイサービスは高齢者が主体であるため、高齢者に楽しんでほしいと思い、《デイサービスでは、病院以上に高齢者の状態や思い、特徴を理解、尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わ(る)》っていた。

「ここだけでも、楽しいとこだと思ってもらえばいいんじゃないって。(C)」

#### 5) 【医療的ケアを含む高齢者の状態と事業所外の多職種の専門性を理解し、情報を共有する】

このカテゴリーは、事業所外の多職種の専門性を理解しながら、高齢者と家族の理解を深めるために、医療的ケアや疾患について家族と共有した情報を専門職で情報共有する看護ケアであった。

デイ看護師が、多職種の専門性を理解することで、伝えるべき職種に高齢者と家族の医療面での情報が集まるように、《高齢者と家族の理解を深めるために、事業所外の多職種の専門性を理解し、家族とも医療的ケアや疾患、体調の変化の情報を共有(する)》していた。

「まあ基本的には、(ケアマネジャーは、高齢者について)全部知ってなきゃいけないのだと思うので。そうですね、私たちも何かこう、(高齢者の状態について)変わったことがあったら、必ずケアマネさんに連絡するよ

うにしていますし。(B)」

#### 6) 【高齢者に必要な医療処置を行う】

このカテゴリーは、高齢者がデイサービスを利用する前に、高齢者の医療処置の内容を把握し、デイサービスでストーマの観察やパウチ交換、内服管理などの医療処置を行う看護ケアであった。

デイ看護師は、医療処置のある高齢者がデイサービスを新たに利用する際、事前に高齢者の状態や医療処置についての内容を把握して、デイサービス事業所で受け入れの準備をするなど、《事前情報から学習し、ストーマの観察やパウチ交換、内服管理などの医療処置を行(う)》っていた。

「最初はその、こういう(ストーマのある)方が来るっていうので、ショートステイに見学に行ったんですよ。(中略)それで(ストーマのケアを)見せていただいて、(デイサービスでストーマのケアを)まあやっつるんですけども。(D)」

### 3. 要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わり

要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わりは、44の1次コード、20の2次コード、9つの3次コード、5つの4次コード、3つの5次コードが抽出された。

5次コードをカテゴリー、4次コードをサブカテゴリーとした(表3)。以下、カテゴリーを[ ]、サブカテゴリーを< >、参加者の語りを「斜体(A~K)」で表す。以下、カテ

表1 参加者の概要

参加者	年代	現在勤務しているデイサービス事業所での勤務年数	看護師としての総勤務年数	現在勤務しているデイサービス事業所以外での勤務経験
A	60	5年	34年	病院
B	60	9年	12~13年	病院, クリニック
C	60	1年3ヶ月	38年	病院, クリニック, 特養
D	40	1年6ヶ月	8年	病院
E	40	2年	13年	有料老人ホーム, 保育園, デイサービス
F	40	1年6ヶ月	8年	病院, クリニック
G	40	5年	21年	病院
H	40	3年	22年	病院
I	60	4年	41年	病院, クリニック, 宅老所
J	60	8ヶ月	37~38年	病院, クリニック
K	20	11ヶ月	3年	病院

表2 デイサービスにおける要医療要介護高齢者に対する看護ケア

カテゴリー	サブカテゴリー
高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために、職場の体制や環境を整える	高齢者の健康面を不安なく確実に支援できるよう、ケアに責任をもつために、職場体制や環境を整える
	看護師が不在の時でも介護士が安心できるように、看護師は医療的知識を介護士に伝える
	高齢者への医師の診断や治療を納得できなくても、受け入れる
生活面を含む医療的ケアについて、介護士と情報を共有し、高齢者のセルフケア能力や身体状況をアセスメントして高齢者に適した関わりをする	食事を含め、医療的ケアについて高齢者のセルフケア能力や身体的特徴をアセスメントし、高齢者に合った関わりをする
	介護士と情報を共有したり高齢者の観察から、高齢者の状態をアセスメントする
家族は在宅介護が大変で、高齢者の病気の理解が難しいので、できるだけ高齢者の疾患や体調の変化、事業所の方針を伝え、家族の病識や思い、希望を尊重して関わる	家族は医療面の理解が難しく、在宅介護が大変なので、事業所の方針を伝え、家族の思いや希望、病識を尊重しながら関わる
	高齢者と家族の理解を深めるために、家族と直接会ったり、連絡帳や介護士を介して、医療的ケアや疾患、体調の変化の情報を共有する
高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる	デイサービスでは、病院以上に高齢者の状態や思い、特徴を理解、尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる
医療的ケアを含む高齢者の状態と事業所外の多職種の専門性を理解し、情報を共有する	高齢者と家族の理解を深めるために、事業所外の多職種の専門性を理解し、家族とも医療的ケアや疾患、体調の変化の情報を共有する
高齢者に必要な医療処置を行う	事前情報から学習し、ストーマの観察やパウチ交換、内服管理などの医療処置を行う

表3 要医療要介護高齢者の情報を得るための訪問看護師との関わり

カテゴリー	サブカテゴリー
高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために、職場の体制や環境を整える	高齢者の健康面を不安なく確実に支援できるよう、ケアに責任をもつために、職場体制や環境を整える
	看護師が不在の時でも介護士が安心できるように、看護師は医療的知識を介護士に伝える
	高齢者への医師の診断や治療を納得できなくても、受け入れる
生活面を含む医療的ケアについて、介護士と情報を共有し、高齢者のセルフケア能力や身体状況をアセスメントして高齢者に適した関わりをする	食事を含め、医療的ケアについて高齢者のセルフケア能力や身体的特徴をアセスメントし、高齢者に合った関わりをする
	介護士と情報を共有したり高齢者の観察から、高齢者の状態をアセスメントする
家族は在宅介護が大変で、高齢者の病気の理解が難しいので、できるだけ高齢者の疾患や体調の変化、事業所の方針を伝え、家族の病識や思い、希望を尊重して関わる	家族は医療面の理解が難しく、在宅介護が大変なので、事業所の方針を伝え、家族の思いや希望、病識を尊重しながら関わる
	高齢者と家族の理解を深めるために、家族と直接会ったり、連絡帳や介護士を介して、医療的ケアや疾患、体調の変化の情報を共有する
高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる	デイサービスでは、病院以上に高齢者の状態や思い、特徴を理解、尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる
医療的ケアを含む高齢者の状態と事業所外の多職種の専門性を理解し、情報を共有する	高齢者と家族の理解を深めるために、事業所外の多職種の専門性を理解し、家族とも医療的ケアや疾患、体調の変化の情報を共有する
高齢者に必要な医療処置を行う	事前情報から学習し、ストーマの観察やパウチ交換、内服管理などの医療処置を行う

ゴリーについて説明する。

- 1) [高齢者看護に活かすために、直接、生活面を含む医療的ケアや疑問、実施してほしいことについて、訪問看護師と情報を交換する]

このカテゴリーは、デイ看護師が、要医療要介護高齢者のデイサービスでの看護に活かすために、高齢者の身体状態やデイサービスと訪問看護の看護ケア内容について、デイ看護師が直接、訪問看護師と医療面での情報を交換したり、多職種を介して間接的に訪問看護師が行っている医療的ケアの情報を交換しているというものであった。

デイ看護師は、直接、訪問看護師と連絡を取り合う、連絡帳を確認し合うなど、＜看護に活かすために訪問看護師と、高齢者の身体状態やお互いの医療的ケアを含むケア内容や薬について情報交換(する)＞していた。また、デイ看護師は、訪問看護時、高齢者に実施してほしい処置についてケアマネジャーを介して連絡したり、訪問看護師からの連絡を介護士や管理者を介して受けるなどして、＜多職種を介して訪問看護師と、聞きたいことや実施してほしいことの情報交換(する)＞していた。

「(訪問)看護師さんともお話して、昨日、お家であの、排便あったみたいですか、昨日からちょっと、痰がらみあるみたいですか、どって言ったりだとか。(K)」

- 2) [訪問看護師と医療的ケアを含む高齢者についての情報を交換したいが、方法が分からない]

このカテゴリーは、デイ看護師が、要医療要介護高齢者の医療的ケアを含む身体状態について、訪問看護師に相談したり医療面での情報交換をしたいが、連絡を取り合う方法が分からないというものであった。

デイ看護師は、医療的ケアについて高齢者が自分で行えるようにするために、訪問看護師に相談してよいか迷ったり、医療的ケアについて訪問看護師に聞きたいなど、＜訪問看護師と、医療的ケアを含む高齢者についての相談など、情報を交換したい＞と思っていた。また、デイ看護師は、デイ看護師と訪問看護師がそれぞれの現場で実践するよりは、もう少し密に連絡を取るようにしたいと思いつつも、＜訪問看護師と、連絡を取り合う方法が分からない＞と感じている現状があった。

「向こう(訪問看護師)は向こう(訪問看護師)で、こっち(デイ看護師)はこっち(デイ看護師)で、みたいな感じで、そこも、どういうふうに、関わればいいのか(分からない)、みたいな、感じのところはありますね。(G)」

- 3) [訪問看護師と高齢者の状態やケアに関して情報交換する内容や機会がない]

このカテゴリーは、デイ看護師と訪問看護師が、それぞれの現場で看護ケアを実践しているため看護ケアを共有しておらず、高齢者の状態や医療面での情報を交換する内容や機会がないというものであった。

デイ看護師は、訪問看護師とは医療面での情報交換の機会がない現状で、デイ看護師も訪問看護師も各々の現場で看護ケアを実践していると感じており、＜訪問看護師と高齢者の状態について情報交換する内容や機会がなく、ケアを共有していない＞現状であった。

「あんまり、(訪問看護師と高齢者についての情報を交換する)必要、うん、そうですね、みなさんやっぱり、健康状態も比較的落ち着いてるし。(D)」

#### 4. 医療的ケアの必要な要介護高齢者に実践している看護ケアの構造(図1)

要医療要介護高齢者に対するデイサービスにおける看護ケアとして抽出された6つのカテゴリーと、要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るための訪問看護師との関わりのうち、デイサービスでの看護ケアの実践に、医療的ケアに関する訪問看護師との情報をふまえていたため、[高齢者看護に活かすために、直接、生活面を含む医療的ケアや疑問、実施してほしいことについて、訪問看護師と情報を交換する]を合わせ、7つのカテゴリーの構造を示す。

デイサービスにおける要医療要介護高齢者に対する看護ケアは、【高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために、職場の体制や環境を整える】ことが、デイサービス事業所内だけでなく、事業所外を含めデイサービスの看護ケア全体につながっていることから基盤として行われていると考えた。次に、高齢者を多側面からとらえて適した看護ケアを実践するために、訪問看護師や事業所外の多職種と、[高齢者看護に活かすために、直接、生活面を含む医療的ケアや疑問、実施してほしいことについて、

訪問看護師と情報を交換する], 【医療的ケアを含む高齢者の状態と事業所外の多職種の専門性を理解し, 情報を共有する】ことを行い, それらの情報を活用して, 【生活面を含む医療的ケアについて, 介護士と情報を共有し, 高齢者のセルフケア能力や身体状況をアセスメントして高齢者に適した関わり(をする)】につなげていた. そのうえで, デイ看護師がとらえた情報を加え, 【高齢者に必要な医療処置を行う】だけでなく, 【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し, 楽しく安心して過ごせるように関わる】ことや【家族は在宅介護が大変で, 高齢者の病気の理解が難しいので, できるだけ高齢者の疾患や体調の変化, 事業所の方針を伝え, 家族の病識や思い, 希望を尊重して関わる】ことも重要な看護ケアと捉えて日々の看護ケアを実践していた. さらに, デイサービスでの情報を訪問看護師や多職種にフィードバックして情報を共有し, 要医療要介護高齢者の理解をさらに深めていた.

以上の結果を, デイサービス事業所以外との関わり, デイサービス事業所内の介護士との情報共有やアセスメントを含めた関わり, デイサービス事業所内のデイ看護師の関わり, 支え

る基盤, に分けて構造化した.

#### IV. 考察

本研究結果から, デイサービスにおける要医療要介護高齢者に対する看護ケアの特徴, 要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るための訪問看護師との関わり, デイサービスにおける要医療要介護高齢者に対する看護ケアの課題, について考察する.

##### 1. デイサービスにおける要医療要介護高齢者に対する看護ケアの特徴

デイサービスにおいて, 要医療要介護高齢者に対する看護ケアは, 看護ケアの一つとして, 【高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために, 職場の体制や環境を整える】ことを基盤にしたうえで他の看護ケアが実践されていた. 介護士に比べて看護師の人数が少ない中, デイ看護師は看護ケアに責任をもち, 要医療要介護高齢者がデイサービスの利用を継続するために, 職場体制や環境を整えることが重要であると捉えていた. さらに, デイ看護師の意欲だけでは, 看護ケアの実践はできても継続できるという確証はなく, <高齢者の健康面を不安なく確実に支援できるよう, ケアに責任をもつた

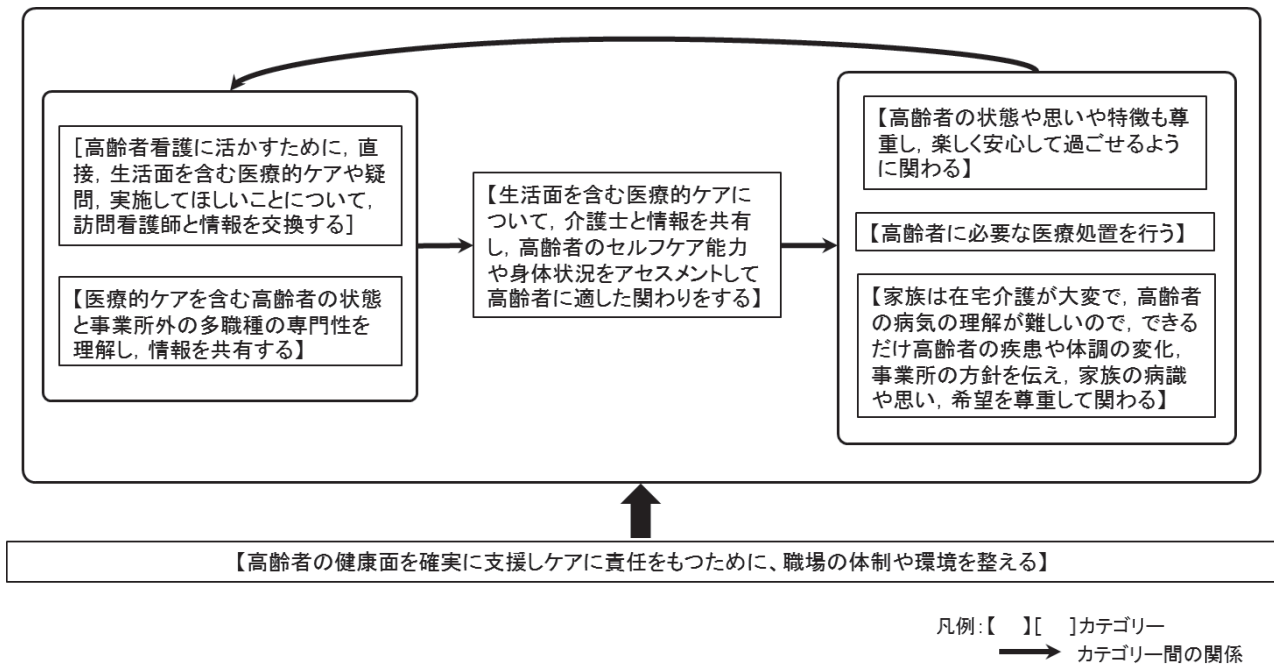


図1 要医療要介護高齢者に実践している看護ケアの構造



めに、職場体制や環境を整える」ことで、他の看護ケアを確実に継続できると捉えていた。そして、体制や環境を整えたいうえで、要医療要介護高齢者について、家族を含め、【医療的ケアを含む高齢者の状態と事業所外の多職種の専門性を理解し、情報を共有（する）】し、【生活面を含む医療的ケアについて、介護士と情報を共有し、高齢者のセルフケア能力や身体状況をアセスメントして高齢者に適した関わりを（する）】行っていたと考えられる。川嶋・森・松宮・磯邊（2015）は、「切れ目のない医療を続けるために、地域で患者に関わる専門職が共通の目標を持ち、支えていく必要がある」と述べている。特に、医療的ケアに関することは、要医療要介護高齢者の生活の場が異なっても医療的ケアが継続されるための重要な情報であるため、デイ看護師が在宅とデイサービス事業所をつなぐ役割を担っていた。

また、本研究においてデイ看護師は、【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わ（る）】って高齢者の思いを引き出す関わりを行い、【高齢者に必要な医療処置を行（う）】いながら、要医療要介護高齢者の医療面に対し、デイ看護師として責任をもってケアを行っていることが明らかとなった。

【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる】には、《デイサービスでは、病院以上に高齢者の状態や思い、特徴を理解、尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる》というサブカテゴリーが含まれており、デイ看護師は、デイサービスが高齢者の在宅生活を支えるための一部であると理解し、要医療要介護高齢者を生活者として捉えていると考える。長澤・千葉（2016）は、通所介護利用高齢者の利用開始時と利用半年後の思いの変化について、利用半年後に「気持ちを分かってくれる安堵感」を抱いていることを明らかにしている。デイ看護師が、【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる】ことは、高齢者に安堵感を感じてもらふことにつながり、1日の大半を過ごすデイサービスでの看護ケアの重要な一部になっていると考える。このことは、介護保険法第8条において、デイサービスが、「当該施設において入浴、排せつ、食事等の介護その他の日常生活上の世話であって厚生労働省令で定め

るもの及び機能訓練を行う」とされていることから、日常生活での支援を主体としながら必要な医療処置を行っていることが分かる。

【高齢者に必要な医療処置を行う】には、《事前情報から学習し、ストーマの観察やパウチ交換、内服管理などの医療処置を行う》ことが含まれており、デイサービスで確実な医療処置を行うために、事前の情報から学習する等の準備をして高齢者を迎え入れていた。このことは、デイサービス事業所における唯一の医療専門職である看護師が、要医療要介護高齢者の医療面に対し、デイ看護師として責任をもってケアを行うことの表れと捉えられる。デイ看護師は病院での勤務経験年数に比べて、現在勤務しているデイサービス事業所での勤務年数が平均3.1年と短く、医療面の情報の不足や自身の看護師経験を通して分からないことを抱えていたと推察される。そのため、医療面の情報の不足や分からないことがある時は、自ら調べる等して知識を補い、医療面の情報の不足からくる不安の軽減に可能な限り努めていたと考えられる。

これらのことから、デイ看護師は、日常生活と医療的ケアの両側面を支えなければならないため、生活援助か医療的ケアのどちらかに偏るのではなく、バランスを取りながら生活全体を支えていた。また、楽しく安心して過ごせる関わりを行うために、要医療要介護高齢者に対しても、医療的ケアだけではなく高齢者を心身面で広く捉えて関わっていることも明らかとなった。このことは、事業所全体においても少ない人数で日々のケアを実践しているデイ看護師は、医療的ケアのみならず生活の援助も実践していることを反映している。

【家族は在宅介護が大変で、高齢者の病気の理解が難しいので、できるだけ高齢者の疾患や体調の変化、事業所の方針を伝え、家族の病識や思い、希望を尊重して関わる】は、要医療要介護高齢者や家族の思いに寄り添ったケアを実践していることである。要医療要介護高齢者や家族は、自宅から外に出ることでリフレッシュあるいはレスパイトケアとなり、安心で快適な在宅生活の継続を支えることにつながると考えられる。デイ看護師は、要医療要介護高齢者に医療面と生活面の両側面から関わることに加えて、家族への関わりも役割として捉えていたことが推察された。

以上のことから、デイ看護師は、デイサービ

スにおける要医療要介護高齢者の看護ケアをカテゴリーに示される内容で実践していたが、デイサービスという日常生活の一部に取り入れられたサービスだからこそ、医療的ケアという側面だけに着目した関わりではなく、生活全体と生活の継続を見据えた関わりをしていたことが明らかとなった。

## 2. 要医療要介護高齢者の医療面での情報を得るための訪問看護師との関わり

デイ看護師は、[高齢者看護に活かすために、直接、生活面を含む医療的ケアや疑問、実施してほしいことについて、訪問看護師と情報を交換する]というように、医療面での情報を日々の看護ケアに活かしていた。鶴飼・畑（2015）は、療養通所介護事業所における看護師が、訪問看護師を含む多職種と情報共有や連携を日々実践しながら利用者のケアを行っている特徴を明らかにしている。これらのことから、要医療要介護高齢者に関わる専門職には、職場を超えた情報収集や連携が必要であり、デイ看護師が、日々的高齢者看護に活かすために訪問看護師との医療面での情報交換は、今後も継続する必要があると考える。

一方で、[訪問看護師と医療的ケアを含む高齢者についての情報を交換したいが、方法が分からない]、[訪問看護師と高齢者の状態やケアに関して情報交換する内容や機会がない]というように、デイ看護師と訪問看護師との連携の希薄さが明らかとなった。袖山・志田・小林・北谷（2012）は、他職種連携について「他職種と“場”や“時間”の共有が少ないことも連携の阻害要因となっていると思われる」と述べており、現状ではデイ看護師が、担当者会議へ出席するなど訪問看護師と対面して関わる機会が少ない（竹森，2009，深谷，2016）。その要因の一つとして、デイ看護師は、日中1人で勤務することも多く、他の利用者への看護ケアの責任から担当者会議に出席することがなく、利用者がいる時間帯にデイサービス事業所から外出することが難しい現状があげられる。まずは、現在ある担当者会議等の“場”や“時間”をどのように活用できるか検討し、デイ看護師と訪問看護師の連携を強化することで、高齢者ケアの質が向上すると考えられる。

## 3. デイサービスにおける要医療要介護高齢者に対する看護ケアの課題

今回の研究結果において、デイ看護師は、訪問看護師に相談してよいか迷ったり、医療的ケアについて訪問看護師に聞きたいなど、<訪問看護師と、医療的ケアを含む高齢者についての相談など、情報を交換したい>と考えていた。デイ看護師は、デイサービス事業所において唯一の医療面での専門職であるため、看護ケアを確実に安心して行うことが求められ、デイ看護師自身も責任があると捉えている。このことから、要医療要介護高齢者の生活を支えるためには、デイ看護師と訪問看護師との連携は不可欠であり、デイ看護師や訪問看護師を含めた要医療要介護高齢者に関わる全ての専門職が、それぞれの関わりを確実なものにすることが必要である。そのため、デイ看護師は、デイサービスで行っている医療的ケアが要医療要介護高齢者の生活を支える一部となり、要医療要介護高齢者の生活を支えるチームの一員であることを改めて認識することが重要である。

デイサービス事業所においては、要医療要介護高齢者に対する看護ケアとして、デイ看護師は介護士との情報共有を行っている。デイサービス事業所における医療面での専門職として、デイ看護師は、介護士の関わりが高齢者ケアに及ぼす影響と重要性について、介護士に伝えることが重要である。在宅要介護高齢者への援助における多職種の関わりについて、大塚他（2004）や平田他（2004）が、専門性を活かした情報共有をすることにより、要介護高齢者の理解の深化や援助に活かすことができると述べており、デイサービス事業所における看護職と介護職の医療面での情報共有に、看護職の専門性を活かした情報共有が重要であると言える。その際、単に医療面の情報共有にとどまらず、相手の職種の専門性を理解して共有することにより、要医療要介護高齢者に対するより質の高い看護ケアにつながるかと考えるが、今回、デイ看護師は、多職種の専門性を理解しながら情報を共有していた。しかし、職種間連携・協働を推進する要素として、多職種に看護の存在価値をアピールし看護の理解を促すこと（古川，2019）が明らかにされており、デイ看護師が多職種の専門性を理解するだけでなく、多職種にもデイ看護師の専門性を理解してもらえようような働きかけも必要である。そうすることで、要

医療要介護高齢者の医療的ケアを含む身体・生活・心理面において、訪問看護師やケアマネジャーなど、要医療要介護高齢者の在宅生活の看護ケアを行う多職種と連携しながら、高齢者の変化を見逃さずに安定した状態が継続するような、高齢者の理解を深めることにつながると考える。

## V. 研究の限界と今後の課題

本研究は、要医療要介護高齢者に対するデイサービスの看護ケアの一部である。また、訪問看護師との関わりは、デイ看護師のインタビュー内容からデイサービスの看護ケアの一部として抽出されたものである。今後は、調査対象や地域を広げ、要医療要介護高齢者に対するデイサービスでの看護ケアの一般的な現状、デイ看護師の役割や専門性を明確にし、訪問看護師からのデータも追加しながら、デイ看護師と訪問看護師との連携強化について検討し続けることが課題である。

## VI. 結論

デイ看護師を対象とした半構成的面接から、デイ看護師が要医療要介護高齢者に実践している看護ケアと医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わりを分析した結果、以下の結論を得た。

1. デイ看護師が要医療要介護高齢者に実践している看護ケアは、【高齢者の健康面を確実に支援しケアに責任をもつために、職場の体制や環境を整える】、【生活面を含む医療的ケアについて、介護士と情報を共有し、高齢者のセルフケア能力や身体状況をアセスメントして高齢者に適した関わりをする】、【家族は在宅介護が大変で、高齢者の病気の理解が難しいので、できるだけ高齢者の疾患や体調の変化、事業所の方針を伝え、家族の病識や思い、希望を尊重して関わる】、【高齢者の状態や思いや特徴も尊重し、楽しく安心して過ごせるように関わる】、【医療的ケアを含む高齢者の状態と事業所外の多職種の専門性を理解し、情報を共有する】、【高齢者に必要な医療処置を行う】であった。
2. 医療面での情報を得るために行う訪問看護師との関わりは、[高齢者看護に活かすために、直接、生活面を含む医療的ケアや疑問、実施してほしいことについて、訪問看護師と

情報を交換する]、[訪問看護師と医療的ケアを含む高齢者についての情報を交換したいが、方法が分からない]、[訪問看護師と高齢者の状態やケアに関して情報交換する内容や機会がない]であった。

3. 介護士や訪問看護師を含む多職種連携の具体的な方法の検討が必要であるとともに、多職種にデイ看護師の専門性を理解してもらう働きかけをすることにより、要医療要介護高齢者に対するより質の高い看護ケアにつながると考える。

## 謝辞

本研究にご理解とご協力を頂いた参加者、デイサービス事業所の管理者の皆様、深謝いたします。第23回日本在宅ケア学会学術集会において本稿の一部を発表した。

## 引用文献

- 地域包括ケア研究会 (2013)：地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点、持続可能な介護保険制度及び地域包括ケアシステムのあり方に関する調査研究事業報告書、三菱UFJリサーチ&コンサルティング。
- 深谷由美 (2016)：デイサービスの看護職が行う利用者の健康管理と、健康管理における他施設及び他職種連携の実態、日本在宅看護学会誌, 5 (1), 142-147.
- 古川直美 (2019)：看護活動から導かれた職種間連携・協働を推進する要素、岐阜県立看護大学紀要, 19 (1), 99-110.
- 東口亜耶, 永田りん太郎, 吉村千鶴, 他 (2017)：入退院を繰り返すパーキンソン病患者の主介護者の思い、鳥取臨床科学, 9 (1), 9-14.
- 平田美和, 大塚真理子, 新井利民, 他 (2004)：インタープロフェッショナルワークにおける多職種の役割－在宅要介護高齢者への介護保険サービスを通して－, 埼玉県立大学紀要, 6, 47-52.
- 川上吉昭, 大内真弓, 阿部一彦, 他 (2002)：在宅介護者の負担度とデイサービス介入の効果、疲労と休養の科学, 17 (1), 77-88.
- 川嶋元子, 森昌美, 松宮愛, 他 (2015)：病棟看護師の退院支援の現状と課題－患者が地域へ安心して戻るために－, 聖泉看護学研究, 4, 29-38.
- 小西倫世, 上山雅子 (2018)：外来看護におけ

- る糖尿病合併症指導と多職種連携が奏効した1例, 看護実践の科学, 43 (12), 20-25.
- 厚生労働省 (2012): 平成24年度介護報酬改定の概要, (<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002113p-att/2r98520000021163.pdf>, 2019.08.27).
- 厚生労働省 (2016): 地域医療構想・医療計画について, (<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000131927.pdf>, 2019.08.27).
- 厚生労働省 (2017): 通所介護及び療養通所介護 (参考資料), (<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000168705.pdf>, 2019.08.27).
- 水尻強志 (2002): 通所ケアの効果, 総合リハビリテーション, 30 (9), 799-804.
- 長澤久美子, 千葉のり子 (2016): 通所介護利用高齢者の利用開始時と利用半年後の思いの変化, 常葉大学健康科学部研究報告集, 3 (1), 31-39.
- 日本訪問看護振興財団 (2010): 療養通所介護における医療連携の在り方に関する実践検証事業報告書 (平成21年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金).
- 新田静江, 望月紀子, 清水祐子, 他 (2005): 通所サービス提供者と利用者家族間における連絡ノートの形式と記載実態, 山梨大学看護学会誌, 4 (1), 27-33.
- 岡本真由美, 竹崎久美子 (2013): デイサービスを通じた要介護高齢者の「安心」を支えるケア～小規模デイサービスの施設管理者に焦点をあてて～. 高知女子大学看護学会誌, 39 (1), 34-42.
- 大塚真理子, 平田美和, 新井利民, 他 (2004): 在宅要介護高齢者への援助活動におけるインタープロフェッショナルワークの構成要素, 埼玉県立大学紀要, 6, 9-18.
- 袖山悦子, 志田久美子, 小林由美子, 他 (2012): 高齢者ケアを実践している専門職の専門性・弱点に関する認識と多職種連携, 新潟医療福祉学会誌, 12 (2), 41-47.
- 竹森幸子 (2009): デイサービスにおける看護活動の現状と課題, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター, 34, 270-277.
- 鶴飼知鶴, 畑吉節未 (2015): 療養通所介護事

業所における多職種連携の実際－多職種連携のレベルからみえるもの－, 癌と化学療法, 42, 39-41.

### Abstract

Aim: To clarify the nursing care of day-care service nurses for elderly requiring medical care and their relationship with visiting nurses.

Method : A semi-structured interview was conducted for nurses working at day-care services, and a qualitative analysis was conducted regarding the relationship between nursing care at day-care services and visiting nurses.

Results: From the content of the interviews, six categories of nursing care were identified, including providing necessary medical treatment and respecting the condition, thoughts, and characteristics of the elderly, and being involved in their lives in a fun and safe manner. All were based on preparing the workplace system and environment to ensure support for the health of the elderly and taking responsibility for their care. In addition, the categories were extracted as an important part of nursing care, including respecting the condition, thoughts, and characteristics of the elderly, and being involved so that they can enjoy their lives with peace of mind. As for the relationship with visiting nurses to obtain medical information, three categories were extracted, including to exchange information with visiting nurses about medical care, including direct and lifestyle care, questions, and what they would like to see implemented in order to apply it to nursing care of the elderly.

Conclusion: The results of this study clarified the basis of nursing care practiced by day-care service nurses, what they consider important, and the current status of their relationship with visiting nurses.

Keyword : day-care service, medical care, nursing care, visiting nursing, cooperation